

想像力の世界と現実の間で

——キーツの *La Belle Dame Sans Merci*

吉 賀 憲 夫

The World of Imagination and the Sense of

Real Things—Keats' *La Belle Dame Sans Merci*

Norio YOSHIGA

La Belle Dame Sans Merci という作品がキーツの想像力観となんらかの関係を有しているということは、もはや定説化しつつある。このバラッドに登場する美女をキーツの求める詩的理想とするなら、何故彼は彼女を単なる美女として描くことを止め、非情冷酷な女性として描いたかという疑問が起きる。しかし、この冷酷な彼女の一面こそ、想像力の世界の美酒を飲んだ者が現実で覚めるときに味わなければならない悲哀であり、想像力の限界を示すものである。

La belle Dame Sans Merci について何か述べるとき、キーツの悲劇的恋愛の相手、ファニー・ブローンとの関係が否応無く議論の中に登場する。キーツの伝記上の出来事とこのバラッドがあまりにも酷似しているためである。実際、このバラッドとキーツとファニー・ブローンの恋とを切り離して考えることは不可能なのかもしれない。しかし、伝記上からアプローチするとき都合なことは、Charles I. Patterson JR.が指摘するように、キーツがこの作品を書いたときには、彼とファニー・ブローンとの間は 大変うまく行っていたという事実である。¹

伝記的解釈から一歩離れたとき、この冷たく非情な女性は何なのか、また騎士は何で、この物語は何を意味しているのかという問いが新たにもちあがる。本稿においては *La Belle Dame Sans Sans Merci* を彼の1819年の春のOde群の中に置き、騎士が“cold hill side”に目覚める時点を中心に、詩及び想像力に対するキーツの一つの考え方を検討しようとするものである。

II

La Belle Dame Sans Merci は 1819年4月21日に書かれた。その後1カ月の間に彼の傑作 Ode が次ぎ次ぎに書かれる。Ode to Psyche は 4月21日から4月30日の間に書かれ、Ode to a Nightingale, Ode on a Grecian Urn, Ode on Melancholy, Ode on Indolence は 5月中に書かれている。このように見てゆくと、

4月下旬から5月にかけてのキーツの想像力の最も旺盛であった時期の口火を切ったのが *La Belle Dame Sans Merci* であったと言って過言ではない。

それでは、これらの Ode 群を貫いているテーマは何であろうか。それはキーツのこの世の中、現世に対する諦観の態度であろう。若冠22才の詩人も様々な試練を経験し、今また母と弟 Thomas を死に至らしめた病が彼自身を蝕び始めていた。彼が *Endymion* で“Wherein lies Happiness?”² と歌って2年後、早くも幸福とは東の間の喜びであり、移り行くものだと思身をもって体験することになる。Ode to a Nightingale では詩人は人間の苦悩に満ちた世界から歌の翼に乗り想像力の別天地へと旅する。しかし、その理想の世界すら彼を長く引き留めておいてはくれない。詩人は再び孤独で悲惨な一人の存在へと戻される。また Ode on Melancholy では美の運命とそこに生じる哀愁の情について述べられる。ここに現われた特徴はまた *La Belle Dame Sans Merci* にも当てはまるであろう。騎士が語る不思議な物語は Ode to a Nightingale における詩人の現世から想像力の世界への飛翔と、再び現実へと帰還するというパターンと一致するであろう。また騎士が官能の世界のさなかで目覚め、死の幻影を見るというコントラストは Ode on Melancholy における美と Melancholy の関係に相当する。このように、彼の1819年の春の一連の作品は相互に或る関連を持っていると言えるであろう。

バラッド *La Belle Dame Sans Merci* の最初の3連は騎士の不思議な物語の聞き手とでも言うべき者の騎士

への呼びかけである。

I

Oh, what can ail thee, knight-at-arms,
Alone and palely loitering?
The sedge has withered from the lake,
And no birds sing!

II

Oh, what can ail thee, knight-at-arms,
So haggard and so woe-begone?
The squirrel's granary is full,
And the harvest's done.

III

I see a lily on thy brow,
With anguish moist and fever-dew,
And on thy cheek a fading rose
Fast withereth too.

甲冑に身を鎧った蒼白の騎士が晩秋の野をさまよっているという古色蒼然としたバラッドの始まりは、読者を遠い中世の時代へと導く。問いかけられた騎士は彼の経験した不思議な物語を始める。騎士の語る話は、彼のさまよう晩秋の世界とはうって変り、それはあたかも春を想像させる牧歌的な世界へと変って行く。

IV

I met a lady in the meads
Full beautiful, a fairy's child,
Her hair was long, her foot was light,
And her eyes were wild.

ここで初めて La belle Dame sans merci が登場するが、その正体は未だ謎である。わずかに “fairy's child” と “wild” という語がそれを暗示するにすぎない。第5連では彼女は “sweet moan” を発し、第6連では “A fairy's song” を歌う。第7連において彼女は不思議な食物を見つけてくれ、不思議な言葉で騎士に愛を告白する。

And sure in language strange she said
'I love thee true.'

いや、告白したと言うより、騎士は告白されたと思ったと言った方がより正確かもしれない。そしてバラッドはクライマックスへと向う。

VIII

She took me to her elfin grot,
And there she wept, and sighed full sore,
And there I shut her wild wild eyes
With kisses four.

IX

And there she lulled me asleep,
And there I dreamed—Ah! woe betide!—
The latest dream I ever dreamed
On the cold hill side.

X

I saw pale kings, and princes too
Pale warriors, death—pale were they all;
They cried—'La belle Dame sans merci
Hath thee in thrall!'

第10連において初めてこの女性が La belle Dame sans merci であることが知らされる。しかし、重要なことは、第4連から第9連までに、この美しい女性 (La belle Dame) は騎士に対してどんな非情で冷酷なことを働いたかということである。もしあるとすれば、第6連における彼女の愛の告白が真実のものであったかどうかという点だけである。しかし、それすらこの段階では真偽は不明である。彼女が騎士にとって La belle Dame から La belle Dame sans merci へと変貌したのは、彼が夢から覚めてからのことである。

騎士は夢から覚めて初めて La belle Dame sans merci の虜となったことを知る。言い換れば、騎士の見た夢を境にしてその女性は性格を異にしたのである。このように考えるとき、この女性は二つのアスペクトから考察できる。一つは騎士の話す世界の中で見る姿であり、もう一つは現実の世界から見る姿である。この観点が変るとき、彼女は La belle Dame から La belle Dame sans merci へと変化する。次に、騎士の語る世界とこの女性について検討することにする。

騎士の語る世界は先にも述べたように現実の晩秋の世界とは大いに異なる春を連想させる世界であり、また “fairy's child”, “roots of relish sweet, / And honed wild and manna dew”, “language strange”, “elfin grot” 等が示すように日常世界とは次元の異なる世界である。この世界を騎士とその美女は彼らが出合った牧場から “elfin grot” へと旅をする。

I set her on my pacing steed,
And nothing else saw all day long;
For sidelong would she bend, and sing
A fairy's song.

彼らは馬 (steed) で行く。この馬は詩的靈感及び想像力を象徴するペガサスと考えることができるであろう。Endymion の第4巻に同様の馬の例を見ることができ、Endymion が Indian Maid と空へとその旅を続けるとき、彼らは二頭の馬 (“two steeds jet-black, / Each with large dark blue wings upon his

back”³⁾に乗る。

The youth of Caria placed the lovely dame
On one and felt himself in spleen to tame
The other's fierceness. Through the air they
flew,

High as the eagles. Like two drops of dew
Exhaled to Phoebus' lips, away they are gone,
Far from the earth away—unseen, alone,
Among cool clouds and winds, but that the
free,

The buoyant life of song can floating be
Above their heads and follow them untired.

(*Endymion*, Book IV, 345-353.)

共通点は馬ばかりではなく、共に美女を伴った旅であり、また“song”に満された旅である。このように読むとき、騎士とこの女性の旅は詩的官能の頂点を象徴する elfin grot を目指した想像力のアレゴリーとしての働きを持つ。elfin grot がこの美女の住みかであるなら、この女性こそ想像力の生み出すエクスタシーの象徴なのであり、彼女に愛される騎士は詩人に他ならないのである。

騎士は elfin grot で眠りに落ち「死」の幻影を見る。夢から覚め、彼は“cold hill side”にいる自分を発見するのである。cold hill side という語はこのバラッドに二度繰り返される。それはこの語の持つ重要性に由来する。それでは elfin grot にいたはずの騎士が cold hill side にいるということは、一体何を物語るのであろうか。言うまでもなく hill side は elfin grot とは対照的な現実を示すものである。しかもその hill side には cold というこの世の厳しさを表わす語が付け加えてある。もちろん、この cold は現実の晩秋の季節感を示すものでもあり、騎士の語る春の世界（想像力の世界）の暖かさと対照をなすものでもある。牧歌的な春の世界が一転して現実の晩秋の世界になったことは、騎士が想像力の美の世界から悲惨な現実へと戻ったことを意味するのである。

この cold hill side は 想像力の世界と現実が接する所である。hill の内部について Wasserman は “In folk literature the inside of hills are often the dwelling place of fairies and elves.”⁴ と述べている。一方、Sperry は hillside に言及し、“the hillside of classical legend became the cave of Celtic fable, closely associated with funeral barrows of the dead”⁵ と言う。この二人の学者の言を考慮するとき、夢から覚めた騎士の悲哀を想像することができる。彼が elfin grot と思っていた場所は実は *La belle Dame sans merei* の虜たち、kings, princes,

warriors の虜れの場所であり、もしくは彼らの墓場であった。彼女が非情で冷酷な (sans merci) 女性へと変貌したのは、彼がこの事実を知ったときに始まる。換言すれば、騎士が想像力の美の世界から悲惨な日常世界へと帰還したときに始まるのである。詩的エクスタシーのさなかに騎士（詩人）を現実に戻す彼女の冷酷さこそ、この美女の持つ本性であると言える。この仕打ちに対する恨みはこのバラッドでは述べられていない。しかし、*Ode to a Nightingale* において

The fancy cannot cheat so well
As she is famed to do, deceiving elf,

(*Ode to a Nightingale*, ll. 73-74)

と述べられている。ここでは詩人は空想力の虚構が最後まで人間を欺き通せない性格を、言い換えれば、人間が永遠に想像力の世界に留まることのできない恨みを “deceiving elf” と言ってなじるのである。

この deceiving という語は二重の意味を持つであろう。まず第一に、詩人を想像力の世界、すなわち現実からかけ離れた虚構の世界へと欺きつれて行くということ。次に、虚構であれ、そこに永遠に留まりたいという詩人の願いを無残にも裏切り、苛酷な現実へと突き落す残忍性を示すものである。このバラッドにおける美女の sans merci である理由は騎士を二重の意味で欺くところに存在するのである。

III

想像力の世界と現実の間にある落差についてキーツは早くから気付いていた。それは *Sleep and Poetry* で詳しく述べられているが、その前に初期の彼の詩の世界（想像力の世界）と現実（実生活）とのかかわりあいを示す例を上げ検討することから始めよう。その一つの例はキーツの詩の中で最初に活字にされ、リー・ハントの *エグザミナー誌* に載せられたソネット、*O Solitude, if I must with thee dwell* である。

O Solitude, if I must with thee dwell,
Let it not be among the jumbled heap
Of murky buildings, Climb with me the steep—
Nature's observatory—whence the dell,
Its flowery slopes, its river's crystal swell,
May seem a span; let me thy vigils keep
'Mongst boughs pavilioned, where the deer's
swift leap
Startles the wild bee from the foxglove bell
(11. 1-8) .

彼がこのソネットを書いたとき、彼はロンドンに医学生としての最後の仕上げをするためにやって来ていた。それまで彼が過した田園生活と比べると、その環境の差

化は大変なものであったことは想像に難くない。時代も場所も異なるが、リルケは『マルテの手記』の冒頭を、「人々は生るためにこの都会へ集まって来るのだが、僕にはそれがここで死ぬためのように考えられる」⁶と書きだしているが、キーツにとってもロンドンという都会はそのように見えたに相違ない。彼はmurky buildingsに象徴されるロンドンの実生活から逃るよう想像力の世界を指向する。彼が Nature's observatory から眺望する自然は彼の想像力の世界であり、それはまた詩の世界であった。彼は実生活の重みを想像力の世界へと飛翔することにより軽減していたのであろう。だから彼の想像力の世界では苦痛が一切排除された官能美だけが歌われる。その点において彼の初期の作品は現実逃避の一面を持っていると言えよう。彼がこの現実逃避という性格を意識していたかどうかは別として、逃避である以上結局は戻らなければならない現実というものが存在するのである。

彼は *Sleep and Poetry* で詩人がよりすぐれた詩人となるために歩まなければならない過程を予言的に述べているが、その過程こそ実は断ち切られている現実とのかわりあいを再び取り戻す道にほかならなかった。

Then will I pass the countries that I see
In long perspective, and continually
Taste their pure fountains. First the realm I'll
pass
Of Flora and old Pan.

(*Sleep and Poetry* 11. 99-102)

彼はまずフローラとパンの領域を通るであろうと言う。言うまでもなく、この世界は自然美の世界であり、官能美の世界であり、フローラとパンという名が示すように神話世界であり、現世の苦悩と無縁の「黄金の時代 (Golden Age)」とも言えるであろう。この世界における喜びを果して棄て去ることが可能であるかを彼は自問する。

And can I ever bid these joys farewell?
Yes, I must pass them for a nobler life,
Where I may find the agonies, the strife
Of human hearts.

(*Sleep and Poetry*, 11. 122-125)

彼はこの自問に対して、“must” という語をもって自答する。この語は詩人の微妙な意識を的確に物語るものであろう。彼にとって官能美の喜びは捨て難いものである。どちらかと言えば、いつまでもその喜びの中に留まっていたいのである。しかし、その喜びはより気高いもののために捨てなくてはならないと、彼は考えた。だが、より気高いものが何なのか、また “the agonies, the strife/Of human heart” が果して何なのか、彼

はまだほとんど何も知らなかった。

ここに述べられた二つの世界は、一つが官能美の喜びに象徴される人生の光の面を表わし、他方は苦悩に象徴される人生の影の面を表すものと思える。キーツが特に人生の影の面に詩人の探求する真実を設定したということは、とりもなおさず彼の強い現実に対する意識の存在を証明するものである。

このキーツの現実に対する強い意識は一体何処から生れたのであろうか。その手掛りは同様に *Sleep and Poetry* に見い出される。それも詩人がより高貴な人生のために官能美の世界の喜びを捨てなければならないと宣言したその直後に。

for lo! I see afar,

O'ersailing the blue craggines, a car
And steeds with streamy manes—the charioteer
Looks out upon the winds with glorious fear.

(*Sleep and Poetry*, 11. 125-128)

詩神アポロを象徴する charioteer は “a car/And steed” に乗り、“green hill's side” へと空から舞い降り、そこで彼と自然との間に対話がなされる。自然は詩の世界へと変貌して行き、そこに官能美の世界が生れる。ところが、その世界は一瞬にして詩人の眼前から消え去るのである。

The visions all are fled—the car is fled
Into the light of heaven, and in their stead
A sense of real things comes doubly strong,
And, like a muddy stream, would bear along
My soul to nothingness.

(*Sleep and Poetry* 11. 155-159)

詩人の幻想が消え去ったとき、言い換えれば、想像力の作り出した架空の世界が崩壊したとき、今まで忘れていた現実の姿が一層生々しく一個の人間としての詩人に襲いかかるのである。幻想の世界がより華美なものであればあるほど、それに比例して夢と現実の落差は大きくなる。詩人は現実から想像力の世界に遊び、再び現実に戻って来た。しかし、彼が帰って来た現実には、彼が出発した時点での現実よりも二倍も強い (doubly strong) 現実であった。このいつかは帰らなければならない現実の存在こそ、キーツに常につきまとっていた想像力の世界に対する強力なアンチ・テーゼであった。

この二つの現実の中において詩人が経験した想像力の世界は単なる虚構の世界であったのだろうか。二倍の強さで迫って来る現実感の中で詩人にとって想像力の世界とは忌わしい夢であったのだろうか。この問いに対して、詩人は次の様に答えてくれる。

But I will strive
Against all doubtings and will keep alive

The thought of that same chariot and the
strange
Journey it went,

(*Sleep and Poetry*, 11. 159-162)

幻想から覚めた詩人は泡沫の夢と消えた世界への憧憬を決して失なうことなく、また想像力が作り出した官能美の世界も真実として、決して疑うことがない。ここに詩人の運命とでも言うべきものを見い出すことができるであろう。詩人は想像力の世界に遊ぶつど、苛酷な現実へと押し戻され、しかも想像力の世界での喜びを忘れ去ることができない。これはそのまま *La Belle Dame Sans Merci* の騎士（詩人）にも言えることであるし、またこのバラッド自体が詩人の宿命を歌ったものと考えられる。詩的エクスタシーから覚めた騎士は *cold hill side* で現実世界での一人の人間としての悲哀を二倍に感じている。何故なら、今や彼にはあの美女もなく、また想像力を象徴する *steed* すらなく、ただ一人で彼が見た華美な幻を追って晩秋の野をさまよう運命にあるからである。

詩人が詩の世界から現実に戻って来る過程は徐々にではなく、突然にと言った方がよい。そこには、それまで至福の絶頂にあった者を一瞬にして奈落の底につき落す残酷性がある。キーツが *Ode on Melancholy* で

She [Melancholy] dwells with Beauty—Beauty
that must die!

And Joy, whose hand is ever at his lips
Bidding adieu; and aching Pleasure nigh,
Turning to poison while the bee-mouth sips.

(*Ode on Melancholy*, 11. 21-24)

と言うときの *Melancholy* とは、消滅することを条件にのみ存在することを許されている美の中にある哀愁の情を示すものである。この情は歓楽の極みに存在するがゆえに、美を追求し、永遠にそれを所有しようとする者にとって一層冷酷なものとなる。

Aye, in the very temple of Delight
Veiled Melancholy has her sovran shrine.

(*Ode on Melancholy*, 11. 25-26)

ここに美の持つ一層の哀しみがある。しかし、この哀しみこそ美をより完全なものへと昇華さすものであり、この哀しみがなければ、たとえどんな美でも夢と同様うつろに消え、詩人はそれを真に経験することにはならないであろう。詩人にとって残酷なことではあるが、彼が想像力の世界が消え去ったときに感じる失意が強ければ強いほど、彼にとって彼が経験した世界がより完璧な、より真実なものとなるのである。

IV

1819年の春の一連の創作活動の終りを飾る作品が *Ode on Indolence* であったことを考えるとき、この作品は一つの重要性を、また一つの象徴性を帯びてくる。

キーツはこの *Ode* を彼の1820年の詩集に加えなかった。これは明らかにこの *Ode* が他の *Ode* と比べ劣っていることに帰因するのであろう。⁷ しかし、芸術的には劣っていようと、この作品が彼にとって心情的には大変気に入ったものであったことは、次の書簡からうかがうことができる。

You will judge of my 1819 temper when I tell
you that the thing I have most enjoyed this
year has been writing an ode to Indolence.⁸

キーツの1819年の気分を代表する作品でありながら、これが1820年の詩集に加えられなかった理由は単にその芸術的劣等性だけではないように思える。それはこの作品の内容にあり、そこで彼はあまりにも自己を告白しすぎたためであろう。*Endymion* の前書で彼があまりにも自己の作品に対する見解を露呈しすぎたため、それがかえって批評家たちの不評を買うはめになった経験を無駄にはしなかったのである。

キーツが「肉体が精神に打ち勝つたまれな例 (a rare instance of advantage in the body overpowering the Mind)⁹」と自らが言う怠惰の中で彼は三つの幻影を見る。

A third time passed they by, and, passing,
truned

Each one the face a moment while to me;
Then faded, and to follow them I burned
And ached for wings because I knew the
three;

The first was a fair maid, and Love her name;
The second was Ambition, pale of cheek,
And ever watchful with fatigued eye;
The last, whom I love more, the more of blame
Is heaped upon her, maiden most unmeek,
I knew to be my demon Poesy.

(*Ode on Indolence*, 11. 21-30)

その幻影が消え去ったとき、想像力によってその後を追いたい衝動に駆られる。

They faded, and, forsooth; I wanted wings.
Oh, folly!

(*Ode on Indolence*, 11. 31-32)

しかし、すぐその考えを改め、その後を追うことが馬鹿げたことだと考える。詩人は自問し、自答する。

What is Love? And where is it?
And, for that poor Ambition— it springs

From a man's little heart's short fever-fit,
For Poesy! No, she has not a joy—
At least for me—so sweet as drowsy noons,
And evenings steeped in honeyed indolence.
(*Ode on Indolence*, 11. 32-37)

キーツがソネット *Why did I laugh to-night?* で
“Verse, fame, and beauty are intense indeed”¹⁰
と言ったほとんどすべてがここにおいて否定される。キーツが全生涯を通し追い求めた詩ですら彼に喜びをもたらしてはくれなかったのである。

詩人は自己の詩を“my demon Poesy”と呼ぶ。Demon とは元来、人間と神の間にあり、両者を取りもつ存在であった。¹¹ その意味において考えれば、この“demon Poesy”とはキーツの理想とするものと現実との間を取りもつものと言えよう。しかし、先に“deceiving elf”を検討したように、この“demon”も、もう一つの角度から考察する必要があるであろう。evil spirit としての例をソネット *Why did I laugh to-night?* に見い出すことができる。

Why did I laugh to-night? No voice will tell;
No God, no Demon of severe response,
Deigns to reply from Heaven or from Hell,

(*Why did I laugh to-night?* 11. 1-3)

キーツはここでは Demon に神と人間との間の介在者としての性格を与えてはいない。God は“from heaven”と、そして Demon は“from Hell”と対応していることからそれはうかがえる。

“my demon Poesy”に戻れば、demon という語にキーツは一種の魔的な意味を込めているように思える。キーツを魅了し、しかも喜びを与えてくれない詩(想像力の世界)こそ、まさに彼にとって demon であったと言って良い。その魔性は“deceiving elf”や、また“La belle Dame sans merci”の持つ冷酷さと非情さに通じるものがある。彼は“demon Poesy”を“maiden most unmeek”と喩えた。この“most unmeek”という形容に *La Belle Dame Sans Merci* の美女の姿を思い浮かべることができる。彼女の本性(魔性)を的確にまた象徴的に表現した一句、“And her eyes were wild”の“wild”こそ“most unmeek”に対応するものである。

キーツの求めて止まなかった詩の正体が *La belle Dame sans merci* であり、*deceiving elf* であり、また demon であることを知ったとき、言い換れば、詩人に束の間の快楽を与え、その代償として詩人により苛酷な現実の苦しみを与える存在であることを知ったとき、彼はそれを求めることよりは、それから遠ざかることにより、自己の快楽を求めようとした。彼はその境地を

a complete disinterestedness of Mind”¹² と呼んだ。

“disinterested”という語はキーツの好んで用いる言葉である。彼は弟 George の妻 *Georgiana* について次のように言う。

She is the most disinterested woman I ever knew—that is to say she goes beyond degree in it—To see an entirely disinterested Girl quite happy is the most pleasant and extraordinary thing in the world—it depends upon a thousand Circumstances—on my word 'tis extrordinary. Women must want Imagination and they may thank God for it.¹³

この文脈から“disinterestedness”と“Imagination”の関係が浮び上って来る。つまり disinterestedness を得るためには Imagination があってはならないということである。これは *Ode on Indolence* で詩人が想像力で消え去る幻影を追いたい“and to follow them I burned / And ached for wings.”“I wanted wings.”)という気持を抑える理由である。追えば必ず詩人は *La belle Dame sans merci* の虜になり、“a complete disinterestedness of Mind”の境地は得られない。ここに詩人としてのキーツと、一個人としてのキーツのジレンマが存在するのである。彼は

Vanish, ye Phantoms, from my idle sprite
Into the clouds, and never more return!

(*Ode on Indolence*, 11. 59-60)

という言葉で *Ode on Indolence* 及び1819年の春の一連の詩作を終らなければならなかった。Sleep and Poety に源を発し、*La Belle Dame Sans Merci* 及び1819年の春の Ode 群で詩と現実とのかわりあいについてその劇的な表現を得、遂に特殊な精神状態であったとは言え、想像力の持つ非情さに耐えかね、それに別れを告げなければならなかったキーツの姿に、また詩や想像力を *La belle Dame Sans Merci* と見たところに、詩に対する、また想像力の世界に対するキーツの一つの見解を見ることができるのである。

注

1. C. I. Patterson Jr. *The Daemonic in the Poetry of John Keats* (Chicago: University of Illinois Press, 1970), p. 126
2. *Endymion*, Book I, 777. 以下本稿で引用するキーツの text は M. Allott (ed.), *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1970) である。
3. *Ibid.*, Book IV, 343-344 4. E. R. Wasserman, *The Finer Tone: Keats' Major Poems* (Baltimore:

- The Johns Hopkins Press, 1953), p. 70
5. S. M. Sperry, *Keats the Poet* (Princeton : Princeton University Press, 1973), 236
6. リルケ (望月市恵訳) 『マルテの手記』東京・岩波書店 (岩波文庫) ・1946年. p. 5
7. M. Allott, *The Poems of John Keats*, p. 542
8. H. E. Rollins (ed.), *The Letters of John Keats* (Cambridge Mass. : Harvard University Press, 1958), Vol. II, 116
9. *Ibid.*, Vol. II, 79
10. *Why did I laugh to-night?*, I, 13
11. C. S. Lewis, *The Discarded Image* (London : Cambridge University Press, 1964), p. 44
12. H. E. Rollins (ed.), *The Letters of John Keats*, Vol. II, 79
13. *Ibid.*, Vol. I, 293

(昭和51年1月10日受付)